



嫌煙の国・アメリカ

秦 正 人*

1979年6月から1年余りフロリダ州・メルボルンにあるフロリダ工科大学へ国際ロータリー財団の奨学生として留学する機会に恵まれた。その間に印象深かったことは、毎週山のように出る宿題やプロジェクト（学生が与えられたテーマの1つを選択して行う自由研究的なもので、学期末にはクラスで各自発表する）、また、活発に質問するアメリカ人学生の意欲的な授業態度などがあげられる。このような米国の学生生活については本誌でもすでに詳細に紹介されているので、本稿では学校活動以外の面で印象に残っている喫煙に関する問題を私見として述べてみたい。

留学当時私は愛煙家であった。1日に1～2箱であったから愛煙家を自称する資格は十分であったであろう。この愛煙家にとって米国での1年は誠に肩身の狭い思いをすることの多い期間となった。と言うのも、一般に米国社会では嫌煙に対して日本とは比較にならない程、確固とした市民権が与えられているからである。つまり、喫煙が健康に及ぼす有害性や周囲の非喫煙者に与える不快感や害に対して多くの人が関心をもっているのである。例えば、米国内で販売されている煙草のパッケージには“有害である”と明記されているのはよく知られていることだが、それ以外にも、空港待ち合い室で喫煙できるのはごく限られた場所であったり、レストランでも喫煙できる座席が限定されていたりする。また、私の学校でも禁煙を成功させるためのカウンセリングと称するものを、禁煙団体が1学期に1回程度の割合で行っていた。このように愛煙家にとっては迫害的とさえ思えるような事例に遭遇する機会が多い。近年日本でも喫

煙の有害性と嫌煙権に対する関心が除々に高まりつつある状況から察すれば、今後米国では上記の傾向が一層顕著になると予想される。そこで、これから米国へ行かれる愛煙家の方々へ何かの参考になればと思い私の経験をいくつか紹介する。

ある時私は友人の紹介で知り合ったR氏の家へ招かれた。彼は60代も半ばでマイアミで退職後の人生を楽しんでおり、煙草は吸わない。彼の部屋で暫く話しているうちにどうしても吸いたくなかった私は、吸ってもよいか許可を求めた。すると彼の答はこうであった。「俺は気にしないが、どうして君のような教育を受けた若い者が煙草を吸うんだ?」。私はそれまで“教育を受けた若い者”が特別に喫煙してはいけないということを知っていたこともなければ考えたこともなかったので、彼の質問の真意が掴めず、その質問が奇異であったことが記憶に残った。しかし、それから米国での滞在日数が増えるに従って、年配の方からR氏と同様の質問を時々受けるようになった。もちろん日本では少なくとも私の知る限りこのような考え方をする人は皆無であるから、大きな違いといえよう。どうやらアメリカ人の一部には（喫煙は有害だ。その有害さは教育によって教えられるものである。従ってそのような正しい教育を受けた若者ならば当然吸わない）という図式が定着しているようである。告白すれば、私はそのような“正しい教育”を受けていないので、R氏のような質問を受ける度に未開人が文明国へ行った時に感じるような居心地の悪さを感じたものである。

さて、別の経験としてサンノゼに住むS君の話に移ろう。S君はシリコンバレーのある電気会社に働く27歳のエンジニアであり奥さんと2人暮らしである。彼とは渡米以前からの友人で、渡米直後、約2週間程彼の家に泊ってもらった

*秦 正人 (Masato HATA), 大阪大学, 工学部, 通信工学科, 滑川研究室, 博士課程在学, 工学修士, 通信工学

ことがある。サンノゼ空港に到着した私を家に案内してくれる車の中で彼はこう言った。「君が僕の所に泊ってくれるのは大歓迎なんだが1つだけお願いがある。家の中で煙草を吸わないで欲しい。ワイフがああ臭いを厭がるんだ」。もちろん私としても彼の条件に異存はなく、それからの2週間は欲しくなれば庭で吸うことになった。このS君の例を最初として、私が米国滞在中に訪問した家々でS君の所のような嫌煙家庭に数多く出合った。その結果、どこかの家を訪問する時には煙草を持参しない習慣が身に着いた。日本であればたとえ家人が全く吸わない場合でも、客が来れば灰皿を出すのは常識に近いから大変な違いである。

また、S君宅に滞在中S君がメンバーである、あるクラブ（もちろん禁煙クラブではない……念のため）のミーティングに参加した。参加人数は50名程で、年齢構成は20代を中心にハイティーンから40代までという拡がりがあった。そのミーティングの後半はピザ屋でビールを飲みながらのパーティーになった。参加者は思い思いに丸テーブルに腰掛けて話に花を咲かせている。私はそのミーティングでは始めから煙草は控えていたのだが、ビールの酔いが全身にまわるに従ってどうしても1本吸いたくなり、鞆から1本取り出し火をつけた。すると私のテーブルにいた連中の眼に突然好奇の色が浮かび質問の矢が私に降りかかってきたのである。「あれ君は吸うのか?」、「どうして止めないんだ?」云々。その日紹介されたばかりの連中からのこのような質問には答えるのに窮すると同時に、居心地の悪さを感じた。それ以後注意して観察してみると、そのパーティーで煙草

を吸ったのは私を含めてわずか3人だけであった。この3/50という数字は米国の喫煙人口に関する統計値をはるかに下まわっているから、このクラブの人々はアメリカ人のランダムな標本ではないことは明らかである。ランダム性を希薄にしている偏りの要因としては、全員が白人であり、20歳代が中心で、比較的教育レベルの高い中流層に属する人たちであることであろう。R氏の項で述べたように、“教育を受けた若者”はやはり吸わないようである。

最後の例として、私のルームメートの話をしよう。私は大学の寮に居たが、一時1人部屋がなく2人部屋に住んだことがある。普通、部屋を割り合てる時には喫煙者かどうかを確かめて、無用の衝突を避けるよう事務の方で取り計らってくれるものであるが、よくありがちな事務上のミスで、全く煙草が嫌いな男と同室になってしまった。彼は絶対に部屋では吸ってくれないと嫌煙権を主張するが、私も勉強する時には絶対に煙草を離せないで“喫煙権”を主張した。この平行線の紛争は約1週間後、彼が出て行き私が2人部屋を当分1人で使うという形で終了した。言わば私が燻し出したことになり、気まずい思い出の1つである。

以上に述べたように米国滞在中の煙草に関する思い出は多い。ところで、私は生来の性格があまりのじゃくであるのか、米国滞在中には煙草を止めることは容易だということを知ったが、止めようという気にはならなかった。ある日止めることを決心したのは、喫煙に関して全く周囲からの圧力のない日本へ帰り、数カ月経ってからのことである。